

自己比喩をめぐって

森 雄 一

1. はじめに一拡縮反復と自己比喩

稿者は、森 (2007) において拡縮反復というレトリックについて論じた。拡縮反復とは、次の (1) の「空想」のように、一つの文のなかで、同じ語が微妙に意味を変えて用いられている現象を指す。その場合には、基本的にその語で指すカテゴリーが伸び縮みするということからこのような名称で呼ばれている。

(1) この空想は、全然空想だから、彼には莫迦々々しく、また面白かったのだ¹。

尾崎一雄『美しい墓地からの眺め』

(1) の場合は、最初の「空想」は、「ある個別の「空想」」であり、次の「空想」は、一般的に想起される「空想」カテゴリー全体を指すと考えられる。

拡縮反復は、佐藤 (1986) において自己比喩という言語現象の一形態と捉えられている。自己比喩という現象には、他にも制限的コープラ文、拡張的コープラ文も含まれると佐藤 (1986) においては考えられており、また、自己比喩に含まれるかどうかは必ずしも明確に述べられていないが、自己下位語関係という現象も自己比喩に密接に関係したものとして論じられている。自己下位語関係とは、たとえば、「動物」は「人間」の上位概念であるが、同じ「動物」という語が「人間」と並ぶ場合は「動物」の下位概念になるという現象である。「動物」という語が、タクソノミーの中で指示対象を複数持っているのである。上に述べた拡縮反復の例は、一つの文のなかで意味が揺れ動くということで動的な自己比喩と考えられる。それに対して、「動物」の例はタクソノミーのなかで固定化されているものとして静的な自己比喩と本稿では捉える。

自己比喩は、佐藤 (1986) において繰り返し言及されている。たとえば、次のような記述を見よう。

用語 = 概念たちは、繰り返しもちいられるその都度、いわば期待されるみずからの寸法に対す

る微妙な比喩、微妙な転義としてみちいられるほかはない、と言いかえてみてもいい。意味の弾性現象を、《自己比喩》あるいは《自己転義》と呼ぶこともできそうである。

佐藤（1986：243）

佐藤（1986）では、何故「自己」という概念が「比喩」にかぶせられているのか必ずしも明らかではない。稿者なりの見方によれば、（1）の例のように、同じ語が同一文中のなかで、意味を少しずつ拡張しながら用いられており、かつどの意味が元かは決められない。すなわち、もともとその概念が拡張を持っていて、その拡張を持つ概念の自己の中で、指示対象が移り変わっていくといったイメージで捉えられる。そのイメージが自己比喩という用語の由来ではないかと推測するが、この考え方があてはまるのならば相互比喩あるいは再帰的比喩という言い方も許されるであろう。また、自己比喩は、佐藤（1986）において、自己提喩と言い換えられているところからもわかるように比喩のなかでも隠喩や換喩ではなく提喩と深く関わる現象であるとされている。しかしながら、上のようなイメージで捉えた場合、他の比喩との関わりも想定しうるのではないだろうか。本稿では、以下、自己下位語関係を論じた2節、拡張反復や制限的コープラ文、拡張的コープラ文を論じた3節に続き、4節では自己比喩と提喩に加え、自己比喩と換喩との関係を考え、5節ではその概念の拡張を考えて今後の展望を述べる。

2. 自己下位語関係—静的な自己比喩

1節で述べたように、タクソノミーの上下に同じ語があることがある。たとえば、「動物」が「人間」を含む場合は、「人間」の上位カテゴリーとなるし、含まない場合は、「人間」と並ぶカテゴリーとなる。図示すれば次のような関係である。



図 1

このようなある語の下位語に同一の語が使用されているケースを指して、佐藤（1986）では自己下位語関係と呼んだ。

このような現象は他の語においても見られる。森（2006）で述べたように、「虫」という語は、大小さまざまなカテゴリーで使われるが、『岩波国語辞典』第7版は次のように記述している（以下の例の下線は筆者による）。

①一般に、人・獣・鳥・魚・貝の類以外の小動物。湧いてでるものとしてとらえられてきた。（中

略)▽昆虫の総称として使うのが普通だが、へびを「長虫(ながむし)」と言うなど、範囲は漠然としている。特に、

ア 秋に(よい声で)鳴く虫。

イ カイチユウ・ノミ・カ・シミ・アブラムシなど、害をする虫。(以下略)

図示すれば、次のように4つのサークル(破線は、範囲が明確でないことを示す)で描ける。この辞典の記述は、カテゴリーの伸縮現象を「一般に」「総称」「特に」というヘッジ表現を使うことにより、うまく処理しているといえるであろう。

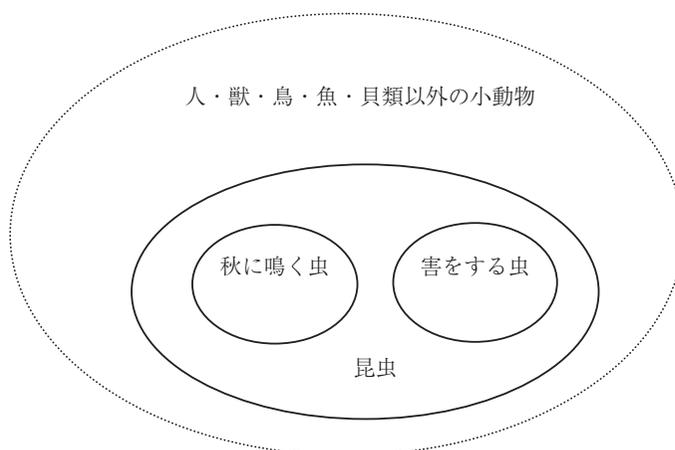


図2

この場合、「秋に鳴く虫」と「害をする虫」の関係を除いた、4つの「虫」の関係は自己下位語関係にある。

国語辞典に記載のないような自己下位語関係も存在する。たとえば、廣瀬(2001)で論じられている「水」である。

(2) 水は100℃でふっとうし、水蒸気になるといいます。すると、もっとも熱い水は100℃ということになるのでしょうか? 廣瀬(2001:687)

この場合の「水」(「水₁」とする)は、「水₂」と「湯」の対立の上位概念を示している。

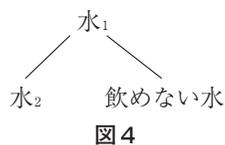


図3

「水」は、上記のように対立概念が明確に語彙化されていない場合も、自己下位語関係を示すことがある。

- (3) a. あの川にはもう水₁が流れていない。
 b. 水₂が飲みたい。

(3b)の「水₂」は「飲料水」に限定される。(3a)の「水₁」の下位概念となろう。その場合、以下のような階層構造となる。



このような自己下位語関係はタクソノミーの上下に同じ概念が出現し、どちらが元であるとは決められないという本稿で述べた観点からは自己比喩と捉えられる。佐藤(1986)では、自己比喩の現れとしての制限的コープラ文、拡張的コープラ文を示す前提として、自己下位語関係について論じている²が、この現象も上のような意味で自己比喩に含めてよいと考える。それでは、次節で述べる制限的コープラ文、拡張的コープラ文と拡張反復と自己下位語関係の違いは何か。制限的コープラ文、拡張的コープラ文は、使用される語が、タクソノミーの上下関係にまたがって振動状態で実現される現象であり、拡張反復は同じ語が同一文中のなかで、指示対象をタクソノミー中の上下にかえながら複数指示する現象であった。これらが、動的なものであるのに対し、単にタクソノミーの上下に分かれて同一語が出てくる現象である自己下位語関係は静的なものであると特徴づけることができよう。

3. 制限的コープラ文、拡張的コープラ文と拡張反復—動的な自己比喩

上に述べたように制限的コープラ文、拡張的コープラ文と拡張反復は動的な自己比喩と本稿では考える。制限的コープラ文、拡張的コープラ文については、佐藤(1986)は(4)の例をもとにおおよそ次のように説明する。

- (4) a. 人間は動物₁にすぎない。(制限的コープラ文)
 b. 人間は単なる動物₁ではない。(拡張的コープラ文)



図 5

(4a) の「動物」は、「動物₂」を気かけながらの「動物₁」、「うっかりすると「動物₂」に引きずられそうな概念を、用心しながら「動物₁」に限定している」(佐藤 1986: 251)。「動物₁」と「動物₂」の間で意味が「弾性的な振動状態のまま実現されている」のである。稿者なりに言い換えるならば、「人間」と「動物₂」は、勿論、異なるものと理解した上で、その近さを意識すること(「うっかりすると「動物₂」に引きずられる」こと)が「人間は動物₁にすぎない」という表現の背後にあるということになる。また、(4b) の「動物」は「おなじ弾性的概念がむしろ反対の方向へ引きつけられようとしている」というので、「動物₂」から遠ざかっていくことが示されていると考えることができる。

自己下位語すなわち静的な自己比喩関係が、一つの文のなかで弾性的に生じているということで動的な自己比喩と特徴づけることができる。拡張的コープラ文については、上の例文のみの説明であるが、制限的コープラ文はさらに次のような例文説明を佐藤 (1986) は加えている。

- (5) a. 犬も動物にすぎない
 b. 犯罪者もふつうの人間にすぎない

(5a) の場合、「動物」の下位に「動物」と「犬」というカテゴリーが、(5b) の場合は、「人間」の下に「人間」と「犯罪者」としてのカテゴリーが臨時のタクソノミーとして生じ、そこに「奇妙な弾性運動」を発現しているとしている³。

以上の制限的コープラ文、拡張的コープラ文の説明に続き、拡張反復について森 (2007) をもとに述べる。稿者は森 (2007) において、拡張反復を「意味の微弱な拡大縮小をともなう語の反復形式」(佐藤 (1986)) と考えるならば、必ずしも、佐藤・佐々木・松尾 (2006) のように「論理学上の規則である同一律 ($A = A$) を見かけ上は肯定または否定する表現」に限定する必要はなく、ある語を一つの句中に繰り返し用いた「同語反復表現」のうち、前項と後項で「意味の微弱な拡大縮小」が伴われていれば、これらも拡張反復に含めてよいであろうとした。また、森 (2007) では、「同語反復表現」、「トートロジー」、「オクシモロン」のなかで拡張反復と捉えられるものとそうでないものを区別したが、本稿ではその考察を承け、拡張反復と捉えられるもののみを以下に提示する。まず、「同語反復表現」については、野呂 (2006) で挙げられた例をもとに述べる。

A. 「XらしいX」

(6) おかずらしいおかずはなかったが、かいがいしく働く母親の姿と、大黒柱としての父親の存在感があった。(日本経済新聞 2005.8.16)

B. 「Xの中のX」

(7) 男の中の男をもって自ら任じている蔵人は、嫉妬などという陰湿な感情は女のもので、男のもつものではないいつも思っている。(海音寺潮五郎『おどんな日本一』)

「XらしいX」, 「Xの中のX」は、前項と後項の間で「意味の拡縮関係」がある。上述の例でいえば、「おかず₁らしいおかず₂」の「おかず₂」は、「おかず」で指示されるもの一般を指す広いカテゴリーであるのに対し、「おかず₁」は、典型的な「おかず」という狭いカテゴリーを指している。また、「男₁の中の男₂」においては、「男₁」が「男」で指示されるもの一般を指す広いカテゴリーであるのに対し、「男₂」は、典型的な「男」という狭いカテゴリーを指しているといえる。

ついで、拡縮反復と捉えられるトートロジーの例である。トートロジーの類型を詳細に論じた坂原(2002)で挙げられた例をもとに述べる。

差異化トートロジー

(8) ネズミを捕ってこそ、ネコはネコだ。

同質化トートロジー

(9) ネコはネコだ。ネズミをとらなくてもよい。

上に挙げた差異化トートロジーと同質化トートロジーの例は拡縮反復に解せる。差異化トートロジーの場合、「ネズミを捕ってこそ、ネコ₁はネコ₂だ」という例で考えると、「ネコ₂」は、ネコのプロトティピカルなカテゴリーを指すのに対し、「ネコ₁」はネコのあるメンバーを指す⁴。また、同質化トートロジーの場合、「ネコ₁はネコ₂だ。ネズミをとらなくてもよい」の場合は、「ネコ₂」は、ネコで指示しうるカテゴリー全体を指すのに対し、「ネコ₁」は、プロトタイプからはずれる周辺のメンバーを指す。このように、かたやメンバーかたやカテゴリーを指すという関係で、この類型のトートロジーのときには拡縮反復の関係にあるといえる。

最後に拡縮反復とオクシモロンの関係である。オクシモロンの類型を考察した森(2002)の例をもとに拡縮反復と解せる例について述べる。

主述型オクシモロン(トートロジーの裏返しとしてのオクシモロン)

(10) 飛ばない鳥など鳥でない。

修飾—被修飾型オクシモロン

(11) 大学じゃない大学

主述型オクシモロンは、坂原（2002）の同質型トートロジーの裏返しとして成立しているものである。この場合、同質型トートロジーと同様に、「飛ばない鳥₁など鳥₂でない」の「鳥₂」は、鳥カテゴリーを指すのに対し、「鳥₁」は、プロトタイプに入らない周縁的メンバーを指すという点で拡張反復の関係にある。修飾—被修飾、並列型オクシモロンにおいては、B-1のタイプが、この主述型オクシモロンと意味的に同じ類型であるが、そのうち、「大学₁じゃない大学₂」のように、同じ語が繰り返し用いられているものが拡張反復となろう。

以上、同語反復表現、トートロジー、オクシモロンの3つのレトリックとの関わりで拡張反復の形式面について考えてきた。

4. 自己比喩と提喩・換喩

1節で触れたように、は、佐藤（1986）において、自己比喩は自己提喩と言い換えられて用いられている。また、自己比喩の一種である拡張反復に関しては、次のような叙述からもわかるように、比喩のなかでも隠喩や換喩ではなく提喩と深く関わる現象であるとされている。

語の意味の微妙な伸縮ないし拡大＝縮小が、古来のレトリックにおいて《提喩》という名称のもとに注目を集めてきた現象にきわめて近いことは申し述べるまでもない。

佐藤（1986：287）

さらに、佐藤（1986）では、拡張反復について「まだ（類と種の）提喩とは呼びにくい闘におけるかすかな提喩、しかも同一の語に対する自己提喩の現象であることがわかる」と述べられており、佐藤・佐々木・松尾（2006）においては、肯定の場合（トートロジーの場合）・否定の場合（オクシモロンの場合）ともに、単純な提喩とは説明できないとされている。このように、微妙な言い回しで、提喩との関係が示唆されている。詳しくは森（2007）に譲るが、森（1998）、森（2001）などで述べた「能力としての提喩」と「彩としての提喩」を区別する考え方から、次のように本稿では考える。

我々には言葉のタクソノミーを上下させて、物事を示す（認識する）「提喩能力」があり、その能力のもとで通常の言語から逸脱したときに彩としての「提喩」が生じるのである。このような提喩観をもとに、本稿で論じた拡張反復についてみると次のようになろう。同語反復表現、トートロジー、オクシモロンのいずれの場合も、タクソノミー上の上下関係が成り立っている二つの項が同一の語で表示されている。「能力としての提喩」を背景に、二項の間を同じ語が上下移動している

ということができらるだろう。しかしながら、その場合、タクソノミーは臨時に形成されたものであり、この二項のどちらかが通常表現、どちらかが異常表現になるというものではないので、「彩としての提喩」が成立する基準をみたまない。また、この場合、全体のカテゴリーを一つの項で代表させているともいえない。したがって、拡張反復は、「能力しての提喩」の反映された表現ではあるけれども、「彩としての提喩」とはいえないのである。この「彩としての提喩」とは言えないが、提喩能力の反映された言語現象であるという見方は、拡張反復のみならず、自己下位語関係や制限的コープラ文、拡張的コープラ文にもあてはまるだろう。自己下位語関係においては、意味変化や彩性は生じていないがタクソノミーを上下させている現象であるということは明白であるし、自己下位語関係を前提とした、制限的コープラ文、拡張的コープラ文においても当然提喩能力が反映されている。制限的コープラ文、拡張的コープラ文は、使用される語が、タクソノミーの上下関係にまたがって振動状態で実現される現象なのである種の彩性を帯びているといえるが、そこにおいて発生しているある種の彩性は、彩としての提喩のように、通常使われる表現から置き換えではないこともまた自明である。

1節では、自己比喩の「自己」とは何に由来するのかについて、同じ語が同一文中のなかで、意味を少しずつ拡張しながら用いられており、かつどの意味が元かは決められない。すなわち、もともその概念が拡がりを持っていて、その拡がりを持つ概念の自己の中で、指示対象が移り変わっていくといったイメージで捉えられる、そのイメージが自己比喩という用語の由来ではないかと述べた。このようにタクソノミーに限定するのではなく、ある拡がりを持つ概念、認知言語学の用語を用いればドメインということになるが、そこにおいてどの概念が元と定められず、指示対象が移り変わっていくというのは換喩にも見られるものである。たとえば、(12)の例では、学校の指示するものが、(12a)では「授業」、(12b)では「校舎」、(12c)では「教職員」というように移り変わっているし、(13)の例では 'bank' が、(13a)では「建物」、(13b)では「従業員」、(13c)では「銀行という機関」というように移り変わっている。これらは、ドメインの中の焦点移動をともいうべき現象で、何が元から決められない。その意味では、「自己換喩」とも呼べる現象であると考えられる。

(12) a. 明日は学校がない。

b. 学校が火事だ。

c. 学校からの連絡がまだない。

(13) a. The bank in the High Street was blown up last night.

b. That used to be the friendliest bank in town.

c. This bank was founded in 1575. (Cruse 2000 : 116-117)

また、一続きの文章でも、佐藤（1978）で取り上げられて換喩研究のなかでは有名な(14)のような例がある。この文章の「隣村」は、場所を示す場合が元であり、それが「隣村に駐在する巡査」に意味を移行させているという点では、上に述べた「自己換喩」にはあたらない。しかしながら、「駐在」はどうであろうか。特に最初の「隣村の駐在」において、佐藤（1978）で分析されているように、「駐在という任務」、「駐在している巡査」、「建物としての駐在所」の三つのイメージが溶け合っており⁵、二つ目と三つ目の「駐在」の表す「建物としての駐在所」と意味が変動しているといえよう。この場合もどの意味が元であるといえない点から「自己換喩」と捉えられる現象であると考ええる。

(14) 正月早々、よからぬことをするものがある。隣村の駐在から、正月賭博をあげるから手伝ってくれと通電があつた。強い西風を突いて自転車を走らせていくと、隣村の駐在には、応援に来た仲間五六人が集つてゐた。(中略) みんな慎重な顔で車座になつて打ち合わせをしてゐたが、その様子で見ると、賭博は相当に大きなもので、手ごはい相手らしい。「君、すまん、正月早々お使ひして」と隣村がカイゼル髭をひねりながら云つた。「いや、結構です」と私も車座の仲間入りをした。すると「シヤモでね、二十名近くは寄つとりますよ」と隣村が云つた。(中略) 犯人を連行するには一列に歩かせた。沿道の子供たちが後からついて来て「バクチだ、バクチだ」「やあい、やあい」と嘲笑し、大人たちまで往來に駈け出して来て、なかには分別ありさうなのが、「敗残兵のやうだなあ」などと云つてゐた。隣村の駐在に連行し、カイゼル髭の隣村が主任になつて取り調べた。彼等は源平にわかれて賭け勝負してゐたと造作なく白状した。

(井伏鱒二『多甚古村』)

5. おわりに一自己比喩の拡がり

以上、本稿では、静的な自己比喩としての自己下位語関係、動的な自己比喩としての制限的コープラ文、拡張的コープラ文、拡張反復を論じた後、自己比喩と提喩の関係を確認し、さらに、自己比喩には自己提喩と解される場合と自己換喩と解される場合があることを見た。本稿の考察によって、自己比喩の概念が拡がりを見せたことになるが、1節で引用した佐藤（1986）の次の記述を考えると、自己比喩は自己提喩、自己換喩にとどまらない可能性がある。

用語＝概念たちは、繰り返しもちいられるその都度、いわば期待されるみずからの寸法に対する微妙な比喩、微妙な転義としてもちいられるほかはない、と言いかえてみてもいい。意味の弾性現象を、《自己比喩》あるいは《自己転義》と呼ぶこともできそうである。

(佐藤 (1986 : 243))

上の「期待されるみずからの寸法に対する微妙な比喩、微妙な転義としてもちいられる」というのは、たとえば、(15)に見られるような自己提喩とも自己換喩とも捉えられないようなかすかな語義の変容にあてはまる。

(15) 白砂、赤煉瓦とブーゲンビリア、そして見上げれば圧倒的な青い空。そこへのんびりと観光客を乗せた水牛車がやってくる。叙情的な鈴の音が、ここに時間が流れていたことをふと思い出させる。というのが、訪れる以前に持っていたイメージなのだが、驚くことに実際に訪ねた竹富島はまさにこのイメージ通りというか、イメージ以上にイメージ通りの島だった。⁶(吉田修一「タケトミジマノアオ」『翼の王国』2015年7月号)

一つ目の「イメージ通り」と二つ目の「イメージ通り」はどう違うのか。一つ目は、「訪れる以前に持っていたイメージそのまま」という通常の解釈でよいだろうが、二つ目は「訪れ以前に持っていたイメージをさらに強化したイメージに適合している」とでもいうようなやや特殊な解釈が要求されるであろう。このような意味の変容は、提喩能力の発現として自己提喩と解することもできなければ、ドメイン内のシフトとして自己換喩と解することもできない、しかしながら、上に述べた自己比喩の概念にはあてはまる。このような、自己比喩概念の拡がりを探究していくことが今後の課題となる。

注

¹ 佐藤 (1986: 297) で取り上げられている用例である。

² 佐藤 (1986) では、「犬は動物にすぎない」といった制限的コープラにおいて生じる臨時的自己下位語関係として「動物＝動物プラス犬」といった「奇妙な弾性運動」が生じることも想定しているが、このような自己下位語関係は動的なものと考えるべきであろう。本稿が静的な自己比喩関係と扱ったようなものは、佐藤 (1986: 265) の述べるように自己下位語関係のなかで「ほんの一部」の特殊なケースとしても考えられる。

³ 佐藤 (1986) では、「[人間＝人間＋犯罪者]という概念の弾性状態は、もちろん「真人間」「人非人」というような語彙単位の生い立ちと無関係ではない。」と述べているが、この現象は再命名と呼ばれるものであり、これもカテゴリーの動的性格という観点から考えるときわめて興味深いテーマである。

⁴ 森 (2007) の説明を修正した。

⁵ (12c) と (13b) も同様の視点から分析できる。

⁶ この用例は、長谷川明香氏 (成蹊大学アジア太平洋研究センター) にご教示をうけたものである。

引用文献

坂原茂 (1993) 「トートロジーについて」

『東京大学教養学部外国語科研究紀要』40-2 57-83

坂原茂 (1998) 「認知的アプローチ」郡司隆男ほか『岩波講座言語の科学4 意味』岩波書店 83-124

坂原茂 (2002) 「トートロジーとカテゴリー化のダイナミズム」大堀壽夫編『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』東京

大学出版会 105-134

佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』 講談社

佐藤信夫 (1986) 『意味の弾性』 岩波書店

佐藤信夫 (1987) 『レトリックの消息』 白水社

佐藤信夫・佐々木健一・松尾大 (2006) 『レトリック事典』 大修館書店

野呂健一 (2007) 「構文文法からのアプローチによる同語反復表現の考察—「XらしいX」を中心に」『日本認知言語学会論文集』 7. 511-521

廣瀬幸生 (2001) 「H₂O をどう呼ぶか—対照研究における相対主義と認知主義—」

『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書』 673-692

森 雄一 (2001) 「能力としての比喩、彩としての比喩」『成蹊國文』 34. 90-100.

森 雄一 (2002) 「オクシモロン管見」『成蹊國文』 35. 114-126

森 雄一 (2006) 「国語辞典と比喩現象」『成蹊大学文学部紀要』 41. 119-131

森 雄一 (2007) 「拡張反復小考」『成蹊國文』 40. 140-146

森 雄一・高橋英光編 (2013) 『認知言語学 基礎から最前線へ』 くろしお出版

Cruse, D. Alan (2000) *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics* Oxford University Press